

日本語を教えるということ

三井 さや花

教えることはある種の権力性を持つ。

なんて言ったら、ちょっとかたいかもしれません。ただ、社会言語学を多少なりともかじってきた私は、この感覚をいつも覚えておかななくては、と思っています。

とかく、日本に住んでいる外国の方は、どのような立場であれ、圧倒的な日本語の渦の中に巻き込まれてしまいます。日本語の情報やコミュニケーションが多くを占める日本で、「自由に日本語を使えて、言語面では不自由なく社会を生きられる人＝言語強者」と「日本語が完全にわからず、限られた情報だけで不自由な生活を送らざるえない人＝言語弱者」の構図ができてしまう。さらに、「教える－教えられる」の関係は、「(言語) 情報を与える人－与えられる人」の構図となり、多かれ少なかれ、教える側が権力性を持つことになります。

でも実際は、みなさまご存じのとおり、教える側が学習者から学ぶ、教えられる、ということがたくさんあります。特に、教室で教壇に立って、知識を一方向的に伝授するより、ボランティアではそのような相互作用が起こりやすいと感じます。

「つまらない物ですが」と言って贈り物を渡すのは日本的だと思っていたけど、トルコ語にも同じような表現があること。かぜをひいた私に、「ごめんさない」と言ってきたアメリカ人は「I'm sorry.」の訳語を使ったのだと、「sorry」の持つ多義性にはっとさせられたこと。「は」と「が」の説明が(理解も)いつまでたってもできないと忘れたところに気づかされること。

彼らは日本語学習者だからこそ、日本しか知らない私にさまざまなおもしろいことを教えてくれます。一回のレッスンで、ひとつの文法や表現を教えたら、その分何でもいいから学習者から何か教えてもらおうのが私の目標です。

ボランティアは学習者の目線で、学習者が思うことを想像しながら、共に学びあうことができるのが魅力だと思います。言語強者－言語弱者の関係性を崩す。再構築する。・・・なんて難しいことですが、日本社会のすみっこで、そういうことを頭の片隅においてボランティアをすることは、結構大切なことなんじゃないかなー、と思いつつ、今日もレッスンを楽しんでいます。